

ひさまつ しゆくざん
久松 肅山(1652~1706)

俳人。松山藩家老。松山城下(現、松山市)出身。松山松平家第4代・松平定直まつだいらさだなおに仕えて重責を果たす一方、俳諧を好み、その才能を発揮した。31歳のとき、松山に来ていた因幡国鳥取の岡西惟中にし いちゅうの門に入り、その後、江戸在勤中に松尾芭蕉まつお ばしゅう、榎本其角えのもと きかくに俳諧を学んだ。句は其角の句集にも載せられ、定直の俳友として蕉風しゅうふう(松尾芭蕉及びその門流の俳風。寂、撓り、細み、軽みを重んじて幽玄・閑寂の境地を求めた)俳諧を松山に広めた。後に、子規から「伊予未曾有の俳人」と評される。また、狩野探雪の画に、芭蕉・其角・山口素堂やまぐち そうどうの発句の賛(添え書き)を求め、松山に持ち帰った「俳諧三尊画賛」の三幅対は逸品とされ、来遊した小林一茶も感激の句をしたためている。

略歴

承応元(1652)年	松山城下に生まれる。
元禄元(1688)年	江戸詰となる。
元禄3(1690)年	其角編『いつを昔』刊行。肅山の句が収められている。
元禄4(1691)年	其角編『雑談集』刊行。跋文(後書き)を寄せる。 この頃、「俳諧三尊画賛」の三幅対を完成させる。
元禄5(1692)年	松山に帰る。
宝永3(1706)年	55歳で永眠

〈関連図書〉

- ・景浦勉『伊予俳諧史』伊予史談会 1958年
- ・星加宗一『愛媛文化双書23 伊予の俳諧』愛媛文化双書刊行会 1975年
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 文学』愛媛県 1984年